止戈類纂

十六

和書門
類
二五二三三
號
九七
函
八
架
四九
冊

内閣文庫
和書
類
二五二三三
號
四九
冊
一五四
函
三
架

内閣文庫
番號 和 25223
冊數 49 (16)
函號 154 20

国立公文書館
National Archives of Japan

止戈類纂 卯 十六

豊後 熟之編輯

明治十一年採求

鈴木重壽南山樓珎藏之記

豫伍

天文廿二年十一月朔日諱信門中為為る武田信玄
志陣を其ゝ日一里傳り家陣すれ是時セり今ゝ之ゝ其日諱
信玄ゝ手紙ゝ字用ゝ中伝ゝ家伝玄ゝ京越越ゝ家
作宣ゝ〳〵ゆを送ゝ中言ゝ之ゝ之ゝ有ゝ時ゝ其ゝ日自ゝ中の合戦
ゝ諱ゝ其ゝ日ゝ切ゝ可ゝ為ゝ〳〵ゝ与ゝ中ゝ為ゝ為ゝ倫を宣

一 先ゝ 志尾平八郎 志尾包に郎 元井自向ゝ
志尾修理亮 志ゝ門 十郎 志内掃部
一 左陣諱 協議ゝ之ゝ郎高ゝ 水間掃部

一右横陣備　印井包弓衛　長尾左京亮

一二番備　荒川伊豆守　山内右衛尉　高坂弾正忠　真田神右衛尉　高力　治部

一三陣　謙信旗本者　東条肩衣着用　外様衆他国衆地侍ハ肩衣ハ着用ス

一鉄砲　組地頭一人　右四十挺宛一人

一弓鉄砲衆　長尾越前守

一後備　長尾弓衛　少輔丹後守　勝海和泉守　大熊備前

一遊撃　飯富下野守

答曰十九備一番の旗、九備人数八人

一後備　人数八百人

謙信公ハ一番ハ物見ヲ九備ヲ以ハ後備ヲ

前ヲ備ヲ　謙信記

天文廿三年五月合戦ヲ謙信二度目合戦ハ自十ヨリ謙信

川中島ヲ戦ヲ有リ此ノ合戦備ヲ

一先陣　諸角豊後　村上義清　ヲ型部少輔

一二陣　川田弾馬　石川備後守

一左備　中条越前守　馬川備後守　板垣左衛門　真田弾正忠　小幡尾張守　小幡左衛門尉

一右備　加地但馬守　新田新三郎　鬼小路孫左衛門尉　栗田日向守

一左横陣　宮山孫兵衛尉　長谷治部

一右横隊　唐崎左馬助　主従八道

一弓部隊　長尾越前守

一小荷駄隊　神谷[illegible]

一後備　本能寺隊　柘植隊　大隊　飛騨隊
　　桃井隊　石井丹後

一後備　甘糟近江守　神保右衛門
　　安田伯耆守　斎藤飛騨守

一脇備　宮崎隊　隊　飯森隊　斎藤
　　柘植　大[illegible]

一殿本　上杉隊　元井日向守　山本宮内少輔
　　南切　治部　　南切　治部

右の通謙信一ヶ色備へ出陣仕候。
備ヘ之武田信玄八月十六日実説仕候ヘ共
厂行の備へ

一先手　高坂弾正　布施右馬助　内藤　刑部
　　高坂合伊勢守　日向守　右馬助
　　宮崎右馬助　五人ノ衆
　　百騎或ハ千の備

一二陣　真田隊　保科弾正　市川和泉守　武田
　　陸野常陸

一三陣　望月信濃守　多田淡路守　海野長門　武田
　　多代右衛

一後備　仁科上総介　井上伯耆守　武田
　　相津山城守　板垣隊

・

一弓箭事行　武田左馬助

左　一条信濃守
海野大弥作　七百騎　大久保内匠助

一　武田信高将軍　七百人

右　遠見山城守　山本勘介　十四日　七斗　弱沢　七斗　税

旗本馬武

一　後備武田五百人　南部入道長雲
飯尾入道浄加　飯富三郎兵衛
和田尾張守
太田伊賀守

総合勢武万五千人　諏信記

五月廿五日に甲を立て東をうと云備を川中島合戦に諏信用の
事義信月の旗本と勢の無本と合る備と云是は上杉
家にて是を用さらるる之家の法は車懸と云陣の形る
板あり是は敵の敵地を先立て陣を立甲方は打掛る
猛なて陣を三人と立る和を敵の備にて甲方備を立る
事をおんと云也甲方のをう抗車掛と三備にて無
れ其切を立る事を敵るおんと掛る事て甲方の方利と
成て是の勝利を得る秘術なる是の川中島合戦
諏信右の事を記されたる也　但甲三月弘治三
年三月廿日門中島降口は諏信車懸と云備にて信方を

引色みは何れも軍の勝さる事を以て伝る元　小武軍記

謙信伝言と為合の時分堀を越て働の伝言伝組一の目

若武者二人目の老武者を用ひ門を前者伝る謙

伝て合戦に成る者の他の色一人目若武者を用ひ

二人目の老切り組て一人後に出し二人目の老武者も

み若目に不吉なれば扇を乃也　征伐之始治

上杉謙信と小笠原氏康武田信玄武田信玄と合戦

の数勢の方後に謙信の数勢を撰て僅八千人三千の

一戦と定られ利の勝をうけ八千を押廻り扇

の勝を切流し敵方の備を切崩して押寄し山の形の城を

一日一夜の籠城次の日本道を塞られし謙信の勝

後あり為例の引組一部と地形と為る合戦　武田記後

上田の合戦は村上義清の家臣の味方七千人の内二百人籠城

退兵を残り殿つを撰て是を家老完の歩卒四百人

城を持て一隅に人数を置て是を防ぐ敵四時陣を

を人数に潜て一人も漏さず力有る足軽人に歩行の陣を

持て我方の前後左右を全く敵を撰て百人矢

の形と成味一名あり仕係の有て是を信じ計を

お呈起す人に時記を持て名を記し三部して是に八方の方

仕人を以て双方共に用を会御を解くしと備まる

めん位のして十四人ありしが元亨の年の初より
俗ゆつりとして名位を望くは宮の御所を仕て
別当とし旗本に令家もなく押掛り義法大方揚て下知
せられけるハ如何なる者を意射放しかしに敬を弓林より
引張て一矢も他者を射留かしに此の者共ハ三敬をよ
くみ敬しかを揚て踏るよ位山徒服を借よ踏るハ
一つもて敬を家にして列を外さしに敬の言を実て踏義
させよ家を憤義と恐あれも是くつかしに男盛の家
法身をとみ双服を直をなつて類りの撃扇し降先
より内術をもし以戦し武田勢術を第人ハ後を

る及ハんとに小戦富書
下俗の用り村岡川とり加りて傳伝と見義等して
戦前勇家の武士位者士を始とし傳伝に加勢り傳伝
加勢の人こよ先を取まる其るの初り勢ハ者を抑ありて
三の郎たり其上に加藤五郎門あり人つて八加りの言るれハ者門よく
知のハんとの又こ傳伝加ハ加勢り集り勢る先をさせ
ろうるいかんと者三服もり傳伝中加左衛門是ハ
其方を進ある術させんあるの義家元の別敬あれハ
集り勢後ハせんる疑あり其附二の同すて其方を進ある
名さとんあるとと節しハ踏ハ法位者の集勢

是を以て此合戦二の日やりて小男小男ぬとて一隊宛
を為し一番遠き軍陣を相廻したる二の日も能き
今て戦ひ一番軍陣を廻り点一隊のして通られしと
ゝ軍陣の世まち恢弘なる由上杉を二の日は
是迄因方物を先なる是れしも此ものと京
勝尻語をしと也　武田信玄
武田信玄尾の城ハ武田相三ヶ国枢要の地心付て武田
の城つゝ海道の越の城の固めの為の定盛を城を小
牟氏張なり中ま二ヶ所に為ものし仕ると陸を定
盛防戦し毎度切張刑を信尾と為ハよりを求るる所
及中絶定盛永正十七年庚申七月廿日と云ふる氏張一万の人
数を以て信尾ヶ元結を定盛ものて五百騎の兵を以て防戦其
侍ハ一騎ものハ信尾形アを其推手元百騎を二隊ものて
強盗寄合荒二十騎余を攻の常陸沢の山石色を西
の山ま隠し盗ハ佛ハ毎の山ものし地りを集かりを打
を附て上を為ものを定隠し盗定盛ハ自分三百人騎を
七隊ものして二人ものハ元ハ陰陽の侍旗ものハ一人ものを
して陰元ものを三ハ是ハ敵の虚実を考て為ものの勝其
陰を為ものを為ものを敵ハ敵他陰を定盛海の防戦を公城
城ハ為陰て陰ものを事ものの先ものを荒川山角ものを

死して後を慕う定盛先生右の方黒田長政公の先
鋒を受けて戦かいる中軍馬を乗て合戦入れ
て雌雄不分とさ城内より強りたる去貞雅未元年十
年孫左の馬口を突て来る小笠原の先鋒と旗本との間の
横合切懸て組伏を得る為に急ぎ出る所に城内より
国より中は虎口為られ小倉をも奪ひ二の合
戦を待て見つけ見たる小笠原方家為れいる
者の後あつてそれ〳〵の後備なる後備家あり定家
是を見て家老を為て敵味方の戦を右より見物あり
旗本を以民弱の旗本つ仕陣あく〳〵とする後去貞の向
敵も先と戦敵も民弱の旗本を後に回ある
内つ戦のしめてる如く旗を巡る如く西の山あり中山右
をつ敵をおろし左味方の後詰山なを為あて陣所
みさ抜る見セ一をさるあり引て小笠原へ切かゝる
つさ接戦の武器をもつ右近は上を敵味方の防戦な
搦ハ仕てたり方の民弱の旗本へ敵よりを後味方ハ
弱盛より敵ハ手おくれて小笠原の先の後軍して民
弱の旗本と混乱して其抜るを見て中山右近を先より進
みて切大き小笠原長後軍と定盛ハ逃る敵をハ小山
を渡して逃ハセ我旗本ハ引揚乱れたる味方おまとめ

倫を立て此時大学ちう懐富門金り三ツ編ぬけの脇指
を以て一騎当千と称せられ引揚たる武士藤元ちうまち
それを味方の信州浅間の武士修行する為
新宮帯刀と云て名人と称して前を為新宮十九
八寸ありし時家武陸
三浦右馬助成良浅ハ小田原と号して云有馬合戦の
成成良又ハ号ハ三浦の和歌に房州の旗本に板倉左
作ちうハ武州の士を撰倫ハ戸塚戦争の大庭草刀作宗
三年を持浦三浦城を預け第ハ人数を以て強て立籠
つれて出ハ三浦の軍弘上倫の方ハ今東西北方の倫方ハ

を右ハ以成良ハ浅中付て先ハ平銀会又ハ弘成院を限又
為成ハ先ハ為れとも本郷なれハ又る一倫ハ中会小和
仕れとも人数を以て別ハを一ハ勿論内ハ為して右の
ハ先ハ倫ハ中二倫ハ橋ハ板倉ハ為ハ先ハ馬ハ随弘赤
先ハ会ハ倫也先ハ門を流さんと為ハ小栗原ハを以て
海岸也ハ倫を立ハ為ハ氏庵為ハ武者二倫為て其場を
見稽ハ味方の倫を引揚たるハ倫ハ方と甘て敵ハを誠
倫方とハ為ハ和を実て立れと為て小和ハ為武者
振見ハ為ハ心倫ハ為ハ一人ハ氏庵の武者ハ
ハ一人ハ安田弥左衛門ハ

義岡佐渡元忠、信義しゃー沢渡へお働其外の拵るをそん
稜り乃至、京師へ向ひ出張あるべし、今日勝利のあるとこそ、敵地
敵大武、植岡を混乱し、敵を奮ー味方を競せ、敗を為て先
先敵の弓矢の切を引受る度ーと毎日敵地へ乱入して拵なた
る加藤義教六郎、渡辺甚内旗本の指尾俱るを為
渡辺甚内の暁渡川を渡河手城を出て働其後植岡
混散ー武士敗走とて其共敵不面出引受て渡川宿
あり、其敵ものしもて吟味の人と仕を越後元治を三生一戦
を拵ある沢元て敵の一色を味方長敗て歩者を
を踊倒ー勝色をそそ引入心右の拵をなて義岡能七郎云

敵を為佐渡元忠、先切に出る越後勢何程あるん不稜るを
が沢能も義岡が加勢もあ出る戦を挑行ー味方僅二三百のも
勢うて植岡混動立て敵大仕る不面合ハ元見成心中勢
を知て不面ハ其自分働ハ保系渡をべー又切後と一番
る出ハ定めハ北中勢と平押掠なりとの批判を云る義ま
て出てハ。てもハ仕ーて不神義ハ敗ー向ハ元合味
方足を河を越ハ敗ハ影ハ敗をあそとー（とも味方三足ハ
ハ足敗ハ二ハ義岡佐渡ハ義代ハ中乃元合ハ後れて不元
合義ハ義岡も先切うて謙信ハ対てさ暫く柳を実たる稜る
れハ兵ハ義あ人ハ今て不義ハ義岡元も弱ハ元も義ハ講渡ハて

の勢をもつて敵国をもて敵軍を以て一働の上此方の勝利を強
し我味方の不意にさと思ふとも一戦の其情りを
永合る一ツ又い敵国小佐波働の為の落城此弱をえ
ては敵国の若し此方敗るまじ敗るれいとて全て
きめを以て敵軍を整ひ働為て其而を引後敵国
なるを為て我国此二ツの内れん抜れい此方を何不論て
備を以て三橋国を退き七分の拵て城落とも敗れし
弾敗を勝斗地の地を考ひ後勝の一戦の内
平均の軍備をとれ備を為の
一先の三の内石い拵たる外三の陣

二中の先い敵国る陣の内をもて為中陣此敵国乱方
の国中目向ち
三左之先い南方陣作敵を陣作平尾之庫
南ノ方
一二の先の三の内方い佐敵一南ノ国三十陣
二中い敵国能先ち為中陣此ち人ち梅の雲ち水戦
竹豊之附国中目向ち備中氏ち人ち陣法之備三郎三右衛門
此陣之郎組ち為陣を敵国旗ち備ノ旗ち中為陣水戦組
を先くを力形る一戦一陣の大旗先と為と其氏先ち風をうて
逼くお空

三 左ハ上杉ノ手備三十備

一 宇佐美手ノ先備三十備ヲ森田流ニ十備ノ内十備加合
四十備ニ勝ノ備トシテ之置

二 村松意手ニ而先備十備ヲ海野甚内組三十備ノ内十五備
加合二十五備ヲ宇佐美ニ付テ一ノ備トシテ別手也

三 宇佐美手ノ備ヲ備ノ内十五備分テ一ノ手ノ中備ト云
越後流ニ七手七備ト定テ内ニテ九ノ手ノ数ヲハ不用九ハ老陽
数ニテ又陽ヲ陪越後流ノ奥儀ナリ

此後手勢先十備連テ佐渡備ヲ後備ナリ松村
後ハ中備流ハ武者ノ武者備也

附 中備流ト云ハ越後手ノ武者ノ何也先ニ十備ヲ五十備ノ五
十五備ノ上ニ持ル流ヲハ十五備ト云但上ノ者同也宇備ノ上ニ
頭ヲハ十五備ト云宇備斗ニ頭ヲモ足軽ノ備ト云也

五 海野甚内ヲハ深田城番ニ残シ佐渡流ニ有ル
旗ニ在ル人質ヲ取テ佐渡流ニテモ勝ヲ上リ
宇佐美手ニ其人数ヲ続キ後ノ備ニ又ハ
越後流中備ヲ残シ置也

右付テ後ノ甚内ノ宇佐美中備越ハ敵ノ味方勝利ノ本
ア敵ヲ押テ不勝仕置之城ヲ後ニハ敵方ノ不
背ヲ入ハ後ノ味方備立ヲ義モ能ク後ニ敵城

の虚を為和をして大合戦の後の時も敵を一勝と不思
て味方の侍の虚も別して一負と分別して不負振能
誠実にて後敵の振るを者れば勝るの不負間おもろく
右に付る三ツの分別をこの分別なくては勝利なし
その三ツは和中後なり
和と云は味方の和不和彼我の吉凶を能計
りて侍押除の侍能をし戦場の地味方能く知るあの時と
天利の盛衰を計知其天利人の和をかつて人の和は天
理の誠なる是を能三ツの調る所不
調ものを和として有るの誠をして有なるを和とも云
て後の不後仕を不仕了て先を敵勝利ても云
中と云は敵討とそうして時と地と敵と為をる勝負あ
れは敵勝利侍の立所の但なる能不宜は勝
其居所てる不成
後とは味方勝利ても後の分別なけれは必敗て侍遠
るの立安のあり本伝其を知て滅亡を滅我事起手而名猶
生手 妄右三ツ所安は後の分別なり能勝ても云と云は
其方なり去の後て今後其方を伐る強一人賢を頼主は
和中後を立ての立まし能後元自然下和を有を武は遅云
ある有ことと云を入立て人賢を為若左様の変あれは一焼

報ゝ其方相服仕て忠義を尽し一生之志を不知者の
勢ひ付志を知たる者を取立宗盛をてゝ先て信濃
ハ平家家ゝ其弱り為相ゝ被ゝ軍勢ゝ被ゝ
ゝ来ゝ取入ゝ信濃ゝ国ゝ内ゝ木曽ゝ義仲と申ゝ小侍従ゝ
働ゝ止ゝ強ゝ掠ゝ敬ゝ怖ゝ者ゝ多集ゝ
陣ゝ張ゝ南侍従ゝ掠ゝ有ゝ北方ゝ出ゝ
て越後ゝ国ゝ迫ゝ南侍従ゝ敗ゝ
ゝ働ゝ止ゝ者ゝ一人ゝ
ゝ形ゝ討ゝ
と申ゝ信濃ゝ仕ゝ三千騎ゝ
ゝ合二千騎信濃と号して二度ハ後刻軍後
を待ゝ者ゝ有ゝ通信之義国軍代の威勢強
越後ゝ国ゝ右ゝ三騎ゝ
ゝ二所ゝ引ゝ
ゝ八道ゝ連て
ゝ敬若掠ゝ静ゝ敬ゝ引ゝ
ゝ
佐渡ゝ根一戦ゝ
二所ゝ長ゝ
ゝ義国ゝ

名を被て居る名を以めて敵を破て敵孫源九郎と共に向上総
介敵味方の一戰を右に入て河上を渡り相模三郎ちう旗本に
向て義経先駆に向たる魁敵是をうけて手旗本に敵の掛ると
見の侍孫さこやさけちう名義経先駆三騎に勝よ手入形
討て和義経の御供たる頂経高つ射あ侍ゼ人自分の陽共に
九人を限りの組人分にして接扇遠よ入三人を敵散靡々
相模三郎ちう先の負武者ものしも不隠無ちうと不有旗本
多人の他しかなれて侍の周囲て挑勢人裏離合討に討れ
つ立義経死さくを先達と攻戰しかるれ義経先ち
我旗本と侍の敵三郎高つ射ける冊侍ちうと此三人は

不働して敵先人是を手所荒尾の侍と共に義経に郎て
相模を以て本ち三郎ちう旗本の後軍と弱き者の侍(実と掛)
り敵る斬首を侍相あ経に切を手にして長合後中
て敵其場を去此を敵方に敵方と後に勝利と
なり 以上
宗勝伝義経合戦
先一番合戦大倉狩豊此二の見あ経上総介三人の人先二番合
戦義経先鬼に此二の人河経軍を尾仕しを一戰イ
不掛て居く侍る宗義の三侍共一人を以義経を討
えりと有之義経を為の侍廿人人に附侍廿人人に附

其内と定其七人あるの大将ハ備前組先方組今後始て
備者共役ハ免共備ハ元死者ハ五千千八百許と余我旅
中を合て七百の内三百ハ先三百ハ二の先陣一百ハ前形より
先ハ出之三の先人三の内中の備を捨て我旗を押立示形
を為て後員の陣を解合る信玄公の風を解郷大将者
庶右とも元なれハ備渡て旗色よ〻一たハ備前左京亮信
玄治組なれハ大将の越て働へと思る元ハ鴻陣も七人ハ
大勝とおて勝よ為ハ其内備の接合を考勝利を後へしと二の
見の内ハ備前人数と復其勝を内合敬慮の変動他異
を何様ハ旋旗不動合敵を方静ハ備ハ其ハ為る御と其ハ
止為備の後不定　茂家武徳

昔し武士ハ作りなるハ我勢後ハ軍ハ合たり大合戦ハ
旅ハ者一備員ハ有之の二ハ家ハ先陣の者ハ百死一
生ハ為ハ強く勇ハ者ハ敵ハ後ハ退ハ心おくれ臆見
ハ為ハ大合戦ハ用れ不ハ退ハ叫ハ後ハ
内ハ備ハ代の内敵後の大合戦ハ討勝たり為ハ味方
員ハ事有ハ之ハ一後ハ大員ハ一定を御ハ法
後ハ用ハ為ハ為ハ為ハ軍法ハ備を一人ハ
限ハ為ハ一所ハ一備の内為ハ武者ハ為ハ
海ハ者ハ服ハ為ハ備の内長大ハ為ハ者ハ為ハ

をもり押てゝ知て其上殿中の警備として勝つるの武者
あり陣を地上にて右陣一河陣てたるを後ろ者あれ
共兵を備へし切掛る敵よ味方の先陣軍と右負後小と
見て小二陣の武者をもり先立て備を寄り先方と三陣を
作て敵を待味方崩れかゝるとも後の味方の
陣先よりもれた右合て後を引若備へ逆入ふんとする
ものあれは切て捨る者は一人も力なく敵勝軍とあれ
必敗を形を長引るを敵よ味方の行作を感じとうんて
叶ゝと者等をも右引退しぬれは弱者合かゝとて
兵法軍をして叶はさる小事多の軍二陣すて切立をする後

こゝ及能中警部三月庚寅六月十二日武田ハ海道すて
宮須上杉胡與と小名氏強合戦ゝ味方の先陣討負ゝと
い号二陣すて切立一の条人討負あり氏康とうん義弘
ハ後の國ゝ者基合戦ゝ先陣ハ負とい二陣すて切立
右後者件の軍法ハ氏強時代の方小事ゝ多ゝ者を負
ゝすゝ大負あゝ後を孔をゝ者ゝ一合戦切後とい
新ゝの敵ゝ二度切後とゝ叶ふつかゝ人ゝ者ゝ後力つ
ゝれ勝を先ゝ人ゝて人ゝ人の後軍と長通を
過ゝ不可ゝ十年ゝ者ゝ人ゝ者ゝ者とうんゝ自とうんと自の方
をも無ゝ長通をゝ河ゝ敵側の敵をふかめ二人ゝ者り

あて矢石を飛つよをたてハ生を敬同ゝて示うけの者一
人引退て彼の者ゆあおちして犯級小生其時長おひて
山人百姓生産かしおあ者を生て庵ちを射かけあとして
ち屠れたる者必ちうされ其者法一抵ハ宝め弛しけ
論ゝて生を合殺ゆ勝て負るあ負て勝るあ之其
期ゆ生てハ若合をも為れん師伯をも用ひて敬ゆて
潔化せるハ勇士のたとへゆ治道と軍陣よりひ石形
の徴ゆ付て叶をあ所えハ討死し道ゝ所を知て命を
合て後ゆ和睦を達ゝ者を仁義の勇士とゆをむま
しさ所をうけ道ゝ者を討死せるハ第ゆ宜けり

是を四海ゆ勇と云一分の武勇を尊むゆハ博市を知
ゆ所宜ゝ人ゆ知ゆて者ゆあけを働き討死せるハ大死ゝ古言、
元ゝ人ゆ者ゆて敬ゆる奥山ゆ紅葉ハ形ゆ弥ゆ多ゆ
と讃ゝ也是ゆあ也ひ為ゆ中条五代記
里見義実云和二心三ゝ古洞を知ゆ有て安房ゆ治り
ゆ郡ゆ地区二人亡ひあ西ハ義実ゆ隆を年来ハ南北の西ゆ
と一所ゆ多ゆ合ゆを押ゆてゆ安房ゆ民をも皆ゆ付ゆ者
皆孔拾て治を始ひ拾ゆれハ名ゆ波ゆ多ゆ市ゆ知陸ひ
人ゆ和睦ゆ義実ハ常ゝ上京ゝ組を定弘毎ゆ者を之
ゆ年ゝ年ゝ所ハ是を以て倫を之る安房敬ハ七倫と世ゆ

又伊予ものも多勢なりしかは然れ一備前備一備後軍
の備たる右二備体陣二組以上二備後陣先備
九ハ体陣又代る〳〵後陣ゟ出ル出ル代る〳〵成ハ十陣ゟ十陣
百陣ゟ百陣ゟ充伏陣ゟ當て名付て成附ハ伏勢ゟ成附
ハ名雲ゟ陣を為し自他変化働き七備と云備なり
惣別備ハ軍場の形ゟ備て地の道し戦ハ車のとくかゝ
〳〵迄ゟ自用を形ゟ右永ゟ百陣ゟ當て形の
上を強くもぶせ其用ゟ右を主あく追軍せつの大ゟ
ゟ者実ゟ強を為舟の上ゟ敵れ右上成男ゟを上ゟ
実為也拵是ハ敬の弁はつゟれ大を人船ゟ人ゟ彼

きハ其形ともゟ軍勢ゟ右を上ゟも敬の形中ゟ移上
ゟも四方の弁ゟ右ゟ左とおちおのゝさたり
此時上陸警ゟ出ゟを右ゟ迫ゟ城ゟ備ゟ備ゟハ
右ゟ西風を為〳〵て何刻も移れハ右ゟ主ゟ西ゟし
右ハゟ為とて安房ゟ國ゟ引備ゟ一右永ゟ國ゟの
軍ゟ又敬ゟ例ゟ右ゟハ付ゟれとて先ゟ為
形ゟ右清ゟ右ゟを以て其ゟ陸ゟ右ゟ無
多ゟを以て伏右ゟ右ゟ山三浦脇山鎌内備
を拵め百陣ゟ右ゟ今後ハ又人形を作ゟ陸至無と為軍
して日を云〳〵彼時ゟ云ゟ同〳〵て彼人形を形ゟ上死

し押をれいあるのとく古賢事を以て彼人形を投ゝ彼を
梅の陰より羅力を以て敵こゝに切をゝ敵事不也とて
あるてゝ又めくはゝ軍中の巧力を以て其請を能ゝ事共へ
先陣のとく石をゝ移入なる方ある者共我れをゝ
投入れ人もゝ方彼れて為移れる敵共の者共
第の敵共を移て踏込し上をゝ上て上方は寄元
のあ賊共寄をゝ入れ味方いをゝ力を以て義
を以て切りゝる是が軍彼れゝ今後の味方も大勝
なれ何ゝ也もと遠ゝけゝ敵陣者ハ情とめゝ
小岡寄荒るかりゝ今後又左陣の者ゝ小岡寄方

敵勢二背間をむを待とて敵ゝ方をゝ以て仕上三石
陣山中の中間を敵が分入待居たゝ又西水岡を以て吞高ゝ
多ゝ長門能登ゝ待ゝ居て二のゝ敵れ方雪の陣を
なして引分ゝ石岡後の勝をせゝやと待掛ゝかゝて敵味方
ゝたゝく戦ひゝゝ小集方ゝ立ゝ事有ゝ軍ゝとゝ
はして待合ゝかゝて西水岡ゝとゝ國ゝをゝて敵ゝ不事
実入義ゝ戦ゝ小集方能形ゝ西ゝ引ゝて
ゝれゝ敵ゝ雄の若者共あゝ遠ゝかゝる敵ゝ伏越へ
ゝ引ゝて後者の方ゝ引味方ゝ以ゝて敵味ゝ相ゝ掛
れゝ敵敗ゝ何ゝ移ゝ西ゝ岡ゝ方ゝ敵ゝ一

もみもとをる時方ハ荒もを引ぬて五ツ寄ハ引合て
逃ぬるとうて実ぬれと休陣ハ為ふびして右衛門を始
ハるかくて敵一もみもと迫みハるを見ハ旗本ハとどろ
候て見へたり左陣ハ豊後守殿ハ出しもふぬ
方ハ押寄る小笠方とうて為ハ為ハ
上ハ大勢の陣へ入て戦ひ敵ハ敗北して筑
中と陣ハ寄ひしめきとうよ成るとうて五ツ山
因ハ分能を寄ぬと一度ハ敵ハ大勝ハ
ハをえてもも休陣をも無ハ和田治兵衛本多武蔵
力を合せよとて左ハ和田ひろ小笠方叫ひしも見ひて

小因ハさして引退くハ敵の中ハ偽
ハ陣を焼拂実光作ハ為ハ出るハ味方の氏
郎ハてまもハ不吉ぬとのひて中ハ引退しのよ
あて世ハ房の西をハ中陣ハと名付て諸ハ陣ハ
なるもとも為ハ寄ぬ是ハ為て軍ハ陣ハ仕ハ為ハ不
稲村孔ハ為ハ古ハ者ハ為ハ死して自ハ弱ハ
ぬれハ新因ハ為ハ出ハ作ハ為ハ三ツ年て三
河ハ国ハ強ハ為ハ
ハハ陣地の二ハ一組ハ何ハ宜ハ仕ハ
板井ハ為ハ諸板之板自人ハ戦ハて仕ハ為

あるとあらたん体の者る指図いるさしてーつ小諸陣の事
るそ来ーて合下合云集余部分支えるそあしてかしし
方法と者中軍法有寄る天合いるさしてー但所付の合下
合云集其伸ちまて定め其為ちあしてかしし計い
中味方の用を行寄とそるあれい敬ー陣さる拵よ
ちかろうーて仮よ忍ひの者の合云集い一人別よ為ー
きるはんち吉姓もちあして能者を用としてー伝を
武士分立戦少拵よ斗ひてきるりあるる軍勢の
疑いさる拵るやあしてー立証を以て考うる時い疑ひ起
ふぬものあり城なのりる伝も用公あて出陣い合伝を

力の者ひもの調る陰陽ちしし伝而八つの切合拵言二つの方
力皆伝と同ーあるる委細い口伝を以ー極をーて完備の
完積分一所要し伝色も備士い皆其公拵而ーる有て
亟々れい不及ともせ死分弱者分備皆天命と新而
の不義を強ひ天阨を為ーて可ーく為い可あるとる拵
ーて不義ーて不義を働い攀嗇う働をあーて死ー
たりとも大死といーづーーるる化
家鑄ち香其の城伝る道を犯伝を進めるしし已
其日ーて初よかやふんと早ー所且分の伝要用田徒
左馬ーをい伝をして出布敵う陣の作ヒきい さる方あれと

余人ハ先ニ番頭を知らん使者今証拠なりや不足也兵空ニ下
知せられて左の太鼓をうたれハ諸手共ニ鯨波の音を合せてとふ
くと起上る足軽ハ下知して鉄炮を揃させ坂の上ニ備さし通
捨しても家押の勢(さ)きまとけ共なれハ忽ち左右の兵共か
んき足搦を付させ足軽の兵を下り寄左右を目当ニ鉄炮と
云者ニ一歩ならニ立所ニ斃兵ハ何の用にそ敵も見へぬ霧雨を
目当ニ走るハぬ何ニてと人ておもしろし鉄炮ニ味方の勢ハ
立つきつれて走寄ニ寄上り既ニ堀迄なれハ左も今にそ破
らきんとて鉄炮ニ左右の寄て尾崎なる村雀の集るとく一旗集て
勢の多かハ知下ニ兵共深林の陰ニ紛れ入て味方の急を

射立んとする時馬て備へし味方の足軽ら鉄炮をうち立て左
右の坂の下欄楯の如く小立並並ぶ兵を先登迄して射立れハ其勢ハ
討しふまされ敵の備る多雲の陣隅方もなく驚き散ル 立花家軍功語
元亀三年十二月廿九日の夕方天ニ武田信玄浜松の城ニ押寄る
大久保忠世十郎忠明 後陸太郎射 号内十之 上一勝宗本一つるか下陰居主備を
たり競見る武田勢か浦止りおハへりる処ニ大将せたり大久保甚七ニ
ある家勝一つるか下立甚十郎ら左右ニ行過ぎつきて却りる
家康公御陣まあれ討もる備や清けと俄下知なし候ハ
我方しと証拠し旗を取て向つかる其勢ニ停見るし信玄
るを退し引取りる 家康公甚十郎をお今日吉田の籠

城をるゐ和ゐく拒つ〜るゆゑ後一年の感カしとたまは感あと
ゆゑに後年をかけ下基モ帝七たゆの射を石表十分て死の
所よりあつまつ〜家後大敵を思る之新の大切とは感
ありは後年をかけるる大河内弓場
武田勝先方流弓根今井遠山は其外武田の車を言ゆ
宿行り城を石ありれ信方合戦の拒るゆは内
東照宮を作い信宮御三二の月の合戦なのるこ是は大なる公
えあり我二十九家の流儀御法の宮先鑑中を宮家ゑ一流の
合戦より毎度鑑中を以勝利をなり先角合戦は二の月を大事
とつしとは鑑中の大事を大和を作はれ勝る為仕方を稽

有て三家の箱を定めゆ上 吉田信
中務の時は先ゆ御下或を捕る勢二百騎斗穴山流百卒
孫昌内勝流百騎斗は先陣を稽ゆ大国を帝たゆ為る海
ゆ石井豊後又る水を為つ三備又る〜丹の島内を東内
有として下を右の日先ゆと信長程流は鑑中三ゆ為ける
陣心は鑑中の日先勢を井伊合於二ゆて押ス甚稽
は上方勢はなるゆを為ゆる二三十を一ゆる稽りを死は
先ゆ後も中勢ゆる一島利ゆ大ゆは強き者ゆる之
後進は上方為利を以つ〜たあはは先ゆを遅て中流を
下ゆ其流れ三て為ゆ為ゆは鑑中と合つゆ備勢と合てゆ

の人数を以て尚ほ勝利とは稱しがたし
なれども斗り詰めは出でざるを
幷伊直政二人の軍人なれども
人の見聞大形ならず保治方の
加藤左馬頭森川金右衛門神谷孫兵衛
丸毛鴻田治兵衛は旗本の負
ハは中軍に甲州の兵は供は
敬をくくたる時甲州者の
垣崎ハ伯の旗の垣旗ハ徳負
ハ毎日程許を立て上る旗ハ押下て
は三河也扨て旗本の先鋒山縣を押
天正十二年四月九日の夜別
下七度の勢を十隊に分て上方勢の備を附て押よせたり秀次
是を見て各合戦に向て居たる人数を押の和泉の
方に隊打敬味方の見けれ不和勢の程七八百の一備うき
雪の山の端をあるが如くなりたり秀次出るを留めれ
隊打あるる勢ハいかに所用の家あり皆しいかに見ふと云
尚ほ続いて又一備あり其方一百斗先を立たり
斗成は稲富山城守秀次公の小兵今中隊打あり
備ハるを待る勢のそれは兵情なれとも中隊打備て

把備前備中両国の二備と陣を進めしかども
先も俄に一ツの城を先一丁計に築かりせられみを立て
城に地を平かにするあり秀吉の後陣中高に
人馬を近都しに近付て中国の勢の籠もる
見るに車の輪の如く乱れ出る　家康公御感動
せらるる弱しく見る秀吉は賢なる勝利を立た
るるなれ小牧の家康つ屋さるもあれ御中国
城攻りは是程人数を出るもあれ
ましさ備を立出るとて郡内村岩右衛門異
捨を見られ三郎張り一ツ絶るて立防戦の場
家康元亨共せ以来ありあり後秀吉先を内中人
衆
討出て不及戦元備前備を秀吉籠中先くえつ
小牧に軍を
小牧まて堀久左衛門山の尾備を郡とて三里あり郡住人数不
高に付て城陣敗軍住人と軍なるべ皆し是程なる
たを後味方後軍住人と見つる数兵今味方を長ら
て五十万内引連給なて三十万討家りて郡
堀百万完て中洲を是程押詰つめ先を強備を
中に是を不知　家康は元亨秀吉後軍を近立て
古近住人岩倉山の尾備を堀久左衛二隊備長谷森
武義は其次池田備入隊押つく是を元　家康は先元

延宝の頃相手に上手を打て候へ本因坊算砂の手
山の上に一段ともつと実なる事　本因坊は先に手直
仕事相手に候事一たりとも不仕延延され候算信も本坊
勝負を他へかけし延討申候柳原氏も可ちてもちり
を持込し合せて防ぎのさと信は大須賀本坊たる本因坊
大力ありて候事あるのよりすれば大橋の後を以て掛の事にて信本坊
上手の始め須賀の者共延合せし防ぎ延と信ぬ　本因坊方能
二段の上手人打れ本坊上手へと成ても危く見て候外積り常陸
数にて本坊方備有りて上手は不積合本十段手にて申して方
合つ捨て延合ひ防戦申候事成て本坊に各も候引こ申候　中程は陳べ出

依て之にて加藤之斗後明葉下総後之内成瀬隼人後内
近年肥前守後は肩道にて大納言様へは本は満とめに大納言様へ
甚目寺之基をは打ちる時は甚目に斗後甚兵衛武公弟
御諸役之者し利家ての外御諸は宇都宮猶後御衆
本との満しも御申候成は人数之様を色て満ち甚大納言
数基をは打仕舞候ては後数とも申にて斗後は合戦
は候ては人数にて候之みならずと押掛り同にて利家にて之
かりしとは宗は数若兵衆の日をは守衛後を兄中は
ふ候真の盤て仕候とは棋数にて基盤の上にて我等一文字
三への上様は先手に作付はのケ様にて仕候に作め事

千五百　旨
旨　三十口　三十口　三十口　五百
五百

武者を出だす数十万ありて年の芸我も備ハ二万三千ばかりて
ケ様に立てかけたるハ七斗俵を色にはたりて一人ハ満
足なりてはなき所なれ共ハ徳にはなりて成敗
出家にはなりなれ共ハ時我も出家なれ共ハ
中ハ書に肥前殿ハ大納言殿ハ高家の内に武道ハ同義
ハ也七斗俵なりとハ言ハ世にはなる 村井長十郎先出
国なりて 権現様ハ軍ハ初時備なりハ同不申也石田
を服にハ覚なれ服にハ備をおされハ後に備なるハ軍法なり
つきかと強き立て石田ハ備崩れハ也 前後前義なり出

家なりなりて中なる中ハ
立ることハ覚なれ彼人なるなりてあるハ見たりと作
りて ハ後編なり 武色雑後
権現様去正十八年家康ハ大坂の加ハ後ハ陣ハ上洛の長
ハ七様をもつきハ供住ハ中なる京の家をハ武りの内ハ立なる
なる人形抱ハ作出ハ中ハ如甲州の京を長ハ其所に永住付くま
立なハ領地の家ハ中なる三河を始とくと上るハ内甲州の上
なハ住をハ神のおハ強高に永住ハ一其所なハ高中に於て
元さく住なりなハ王ちの家ハ甲州信濃同なも有元ハ伊
自然の時ハ甲の為なハ有ると有ハ右ハ中ハ国分の家ハ

を所望に付彼の指図を以其方中納言殿
の使に右の由を申渡の者共中実を仕て
く有之に付慶長四実に一戦以後天下一統に
付町人ともの仕業と成候由を以右申渡
右申渡の写とお宝り記に付まとめ申渡候の三箇条
ともに遠国にのこさる有之に付其儀に付申候とかるも
に付誰も不存に付実に表に於て九月十五日に一戦の前
に一戦の別に旗本に申渡の三箇条に成り而元和元年閏月付中の
箇条とも不作者に其後大坂陣の時に旗本箇も抜の者に
先の実に表の如く一ツ作付に二条に城に於て如多

上聖御右の通に付其方に天下分目の合戦も秀頼を
成敗申付候も同様に成候に今後我に旗本箇条箇条法
の入つる通のあつに平押に押寄の味方の軍法に成候
所為に所りと云付よとの上三ツ寄て居て也
然に実に表に於て五に一度ならて 槍隈掛寄事
実後に立まに迫たる時旗本箇のもまを見たる
ものに成候くりとあり 後法本集
大権現御不例の 大権現たり 大坂取刑勝
を百に遺言の言あり別其旨をみ 台徳院殿云
上に作に五月軍法の法度に成に其次に

弓其次ハ徒其次ハ騎ると雖ども定偏とハ是ハ[illegible]弓
を以て先とし其次ハ騎ると雖ども徒を以て先とし或ハ
右偏として是を一所ゟ集めて別ゟ多人を立てその下
知を待つさるゟ汝いかんと思ふや臣家の後世ゟ為て
将軍家ゟ昔て議定をつとしたるものゟ　貞永書史
石門伯耆ゟ戦場ゟ毎ゟ一番ゟ諸人ゟ先ゟ偏
の下知をとるさるゟ或ハ同軍ゟ名士ゟ先ゟ戦ゟ偏ゟいん
ゟ基先ゟ石門ゟて左右ゟ定ゟ富あるゟ之ゟ凡軍ハあやかし
成ゟて是ゟ合の時先を不為ハ始終ゟ勝ゟ成ゟき
ゟと二度三度ゟ戦ハゟ形ゟ[illegible]ゟ一の偏ゟ後れてハ二の偏ゟて

もゟ逆ゟ勝ゟ為ゟと云ゟるゟハ大方ハ左ゟ右ゟ偏の打ゟ先
を為ゟの公ゟ為ゟ知て下知をとるさゟれハ勝ゟ抜ゟ
其下知をとるさゟて軍ハ人多ゟとハ[illegible]其大将の下と二人ゟ三人
ゟてハ左有也　是我常ゟ先立て見切を為ゟ打引を為
と信ふ九しとゟる山麓是を守て是ハ戦ゟ為ゟ[illegible]
云ゟる之是一行ゟ公ゟ為て云ゟ[illegible]
前陣破ゟて後陣ゟて打囲めもりゟ逆ゟる事ゟ其例
多ゟ為ゟと云ゟし　前陣ゟ為ゟ前義ゟ為
大坂陣動の上杉景勝ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ十月朔日
藤河ゟ為ゟ其日　大御所孫ハ観世左近ゟ能ゟ仕

其上常陸介頼宣水戸宰相千代丸をも従へ給ひ旅と
して御仰付の京都を出て大坂を遥の陣所を定め
上しかれは給止り九条より上て雪介伊板倉内膳正定
而と百余人十一月に御馬を出され諸大名を御自ら
従ひ御押陣の次第は大和組は其後大和路を出ては紀伊を
通り伊勢通へ美濃尾張三河遠江の軍勢共ハ一列
にて御陣住江州勢多を限て其陣を張り先紀伊を可待
は当国勢ハ大津坂本堅田を限り御陳し西国勢ハ西ハ兵庫
限り中国ハ池田を限り北国勢ハ泉州へ向かひ其陣て待
其の和田城へ大和勢へは加勢として今森に陣取て

不残参陣すべき旨十一月六日に相触らる右の趣にて京都より今
御陣にて残らず給ひ数通お諭されて付きて従者共に渡し
下知勝手次第にて進発の間に付き従者共に渡し両通
て御さへ下さる御仰渡され旗を旗に立てにつき
旗を手に立てハ名を見て入道保は令合戦の御仰付け旗
手には大久保平助若林和泉に仰付け陣用意之 大坂は陣先に
大坂よりハ大野修理を大将として三府越前兵を大坂より出る
兵を布く城中右備へ木村長門守人を従して泉州堺の陣へ
先だちて乱妨せんと申すなれ共九月の末頃に伏見勢を
押さへ諸勢引返しも認めし押出しける堺へ入らんとして其

和田をさして働くされば其和田の搆はして歩
行伊國に越く者中あり和田も手搆してあまいで
右警備かにて南見堀といふ和の名陣して
諸勢かてをいんとして此より先陣作
先歩行ふ人見堀の和元と和に敬彼の地元
搆して已見堀をあるとまつ一かもよ作者のかるつ押
なん接拒なり此まつ一かもハ者の拾月十六日の夜
信岡右馬つ者ら名帯中金て城傾なるつ形対
にるる品ア者るる和ようせるるを言老ものる
見堀ようて敵をたらひ和ら和を品アたしめさて掛け

こ元る其時出右馬つを婚諸勢軍法を被り行もかま
ハかもよ仕るとて元たる無るる右の歩有ちハ先
沖者左馬つ依る陣場て上を告る左馬つ作右上者夫
お依して旗本つ元をしけれハ但馬ら下和して曰敬ハ猛
勢なれハ手地の合戦叶かるし先の行伝達つ引
取稲井の河原つ敬を引ら伝達山の者の上ら敬をあ
立てそおりて上虚実を元宛其上りて軍を進ずしと
ハをしられハ先る拾陸て伝達をさして引る 武右お後お
彼作右京たち和寅ハ信旗中ら百八十斗まて今稲村の
前ら傷を立和られしら先の後軍を元て敵ら元た

より御船を出して直に地上る者秋田の人数
未だ本陣なるを見て矢利なる会合の義宜しく先
つ第巳三時させ申候家毎沿岸に防禦を設け前
一人も不出様にと自分つまり出申の故和の迎
先鋒の中に第巳の義宜敷と思ふ鹿を振
下知しの下に陸も山と引き引き迫せ申の一人もなし別
旗本備番をて行軍宜敷を為方仕を以向略を
加勢を乞申の京勝百名松平常陸介親憲を大将
七百余人援合を入れの陸中を通り共に沿して越
る石井筑前守大陸下知して陸地を大稲〳〵今福堤を
本村海岸堤岡の勢を援合まで立る者の後るとく者
出つ又三番の人数を下ま出さして引元中の堤の上
を切る石井清之進の小の水路を引中の今福口長谷川先
鋒の敵分上形勢四五名早引上り長谷川
て引取の佐竹勢又勝の者て長谷上形加勢勝の大
間中間を為て己革を不容ま三の者陸奥堤の上
を切者の為る者本村の組大井伝右衛門以下松平
鉄砲の陸地に付死大井伝右衛門死数伝の辛引上
中に入れ佐竹方の中に出て一番の者共つも大切に引
退海岸又三番も鉄砲頭の毎衣張の一名と

家を山岡和泉に託け其家は大坂に引き組響は今福の
柵を拵固め同月廿五日大坂に着陣完了
氏は関東カサイ方備まて合戦の別使を以備前国
方脇より先を付る義判氏は今福に後て毛
利まて行は今後の働不可能明日の先を我者
共より付るあんらん後りへと申し和田伯耆
和泉伝濃等先内兵庫を陣取高槻に二人
於合戦を先を付右方人数者共中は明日
の合戦は大坂と共の和方使者共の働振り五
寄とて我くに作付行はれも討死したりとてもそれは
一分の志迄て氏は京月院遠の方術年を迄不浮拵
京合は生は内方不詰は成るみとて先の人数百連寄
西を迄の方は詰を大坂を他法不調者に立人
の者とも清人中家は明日の合戦は一人たるこなるを
ぬ氏なるを詰を行しものを迄法の限りあるべし
中はいとくと行るし其後を迄不孔を定を
如くに有しこの如く絶日あり毎日合戦詰しは
を迄自ゆるを毛弱不働なり其法弱西軍物
仕是お戦に右合戦の拵るに有毛したる軍
絶こなくるるしとて不弱奮るるし氏も対の和の

機遇ふて六人の者たち家大屋根者感状をおそく
取せらる 落城ゆゑ感状を頂し給ふ也 武功雑記
城和泉玉出次郎は真田陣の家の内の有之侍
勢嶮岨なれとも是不自由と有て拾人
お供侍は拾郎は兎角味方屋敷のあけよう悪敷
てハ拾郎ハ平兵衛刑を潜りて家とのまとの事ふて
権現様御拾郎ハ上方様に内蔵に帯たる馬を
高田に帯たる馬に屋敷の内ハ馬に乗て侍
ふかけてとのるこ馬ハ乗ふ侍ハ中内ハ仕ふ侍ハ先て
ハ能ひとかるハ和内ハ不強侍てさ能ひとかるハ内ハ侍ハ犯

者ハ下馬ふて二十人ハ分て能ふ其ハ後
のけハ城の合戦ふ取るをたて 家康公ハ切腹を戦
ひとおそ屋敷ハ和とおそ能ひとかるハ能ふ内の侍
ふ味方を引取 元和偃武記
大坂陣三度 権現様ハ高田ふて大坂角様を出ハ
ハ敵ハ様ハ出ハ内ハ和也 武功雑記
大坂ハ様ふる様ハ様ふ上ハ様を様様ふ様ふ様ふ
ふる真田左馬ハ様ふ我ハ内石様ハ伊豆様ハ森豊前ハ
ふ村ハ様ハ様ハ井伊様ハ様様ふ様ハ右の様中ふ様ふ
ふの様ハ様ふ集ハ成田左馬ハ七組様ハ其ふ様ふ二千様ハ

拾口流矢多おこれり其人つとの諸勢を率して敵に向ひ
天満南より秀吉勢 宮部の備を乱して協力の兵
京極高次より秀吉に感状を下る
及ぶの諸侍 みな軍術 賢利なるものかくやと
目を驚かしける 古今まれなり
我しれる家の時 芳賀色との或者雑後に帰りて仕
らせりしつるる多き中に合戦の時 或者まれたる人諸勢
の訪ひ来るに 勇ましき武士なりとて 或人の
待るとの或人 有たる者 ちかるを見をんとて 雑兵の
集りし兵 扇ひの人数 百騎にて 孤弱に成りしかくれ
迫る 此の方に居る 右のとく 雑兵 集りとて 一日の人
数をさして 数二の掛り 此人 伝後を 有の其時 ちかるけよ
能 二つ 見 惜る 行宮 ちかるは 信 我 一世 百合戦
の時 一 後 ちかる 引 ちかる 無 ちかる 其 院 あるまし
さよう〳〵 常〳〵 ちかる 事 細川家 隔 信記
みの人数 ちかる 二 百 ちかる 三 ちかる 他 ちかる 能 との
ちかる 其 ちかる 博 ちかる 二 所 三 所 ちかる 人数 ちかる 所 ちかる 所 ちかる 高
も 万 を 率て 侍 ちかる 能 ちかる 先 合戦 ちかる 二 の 月
そこ ちかる て 侍 ちかる 能 ちかる 先 合戦 ちかる 二 の 月
ちかる ちかる と 細川 能 ちかる
ちかる 二 の 月 信

義四郎七郎殿勝の常は定め置れし一番旗奉行
陸二の月出羽山城三の丸番所又一番旗奉行
なり出羽より其ころ博多へ下七日あるて下るなり下るハ皆し
侍の海ろ脇によろ皆しあるたちて流くちゆとまり斗ら
下る事多ろ先々合戦始る時二の月三合先頭て味方
二の侍つに逆侍ハ渡ろ事も切つ置て定置上ハ進みかく内
あるハと定め置れ中あ指ものし　三海の指
義四郎殿の物指ハ杉原奉行中の定置を抜と出てあ
すろ向ひたとつハ定置なきあハ其あ二ろ入て其あ
人ハ上ハ時まと能ん引付てあ事を抜下部て

おせみ姫ゆ御ものの命を大静ハ某ハ上ておきれハ
大略敬宥ハ之常ハ定置ハ出ハ上　日上
侍をかくもとろと云ろハ一ものくも侍つまとふまみさ
抜と云れ〳〵道具〳〵一ろ抜て抜士ろハ下りて懐の
陽ハ居て一ろをハ上ろさ旦又一番ハ是てまとふかけの
ものさ抜と云ろを能侍とハ下ものし　日上
本朝の三ハ数ハ方ハ面数の分数ハ上ハ面あり
一国ハ千万石あてまして十万石の分を成て斗ろ陸ハ
二万陸ハ一ハ陸ハ百ハ上　侍ハ家ハ指
義侍ハ右と武者ハ定侍ハ上ハ上ハ其内と無し

を定めて其比を定めるとされ其
その比をもあさひ其吟味あるべしと
とて成らざりしとかく一度は引の名残
との事なるべし　日と
徒信の軍のたひもとそ偽ても有てもあとを偽
めひたる事のよし諸伝の説
偽をかうるとそくるとをかれ勢地形の定め
あるべし　雪士雨徒一言集
一書二書三書と但てまた偽るは一書凡合戦始て二書の
勢を見合て自然合戦に勝利を失ふ長三郎ても諸
勢の所ての雑兵とも事と為りとよ
道法を見合せて中の先手の事もさきひよ
あまり自然遅三郎の時諸勢のあるとあるとも
とよくしりの其あしとうてあたるとのすてる
細川幽斎自記
尾張の人数を三郎とも負の人三郎負と三郎
人数の落くるもあるてい乃負より ちとかり見え
をるをかもめ拙三てやれ悪して云る偽りをひくミ
ゆ見るつい敗れ落くるものすてい先の勢
の多さおきもるつて人数もあつくるもるとの

細川忠興日記

事

弓張城を攻めたりしかるてハ不手あしき所ハ武士ハ傾城をそなれ居つく雑と知れ振も能見ゆるち

磐一所なれハ討ものなり　武家雑談

此城ハ大ける高麗の夏を云ふ　大蔵院孫作代

大ける高麗に作作ハ此城ハ甚上再聚に成ける

城の中上高ける傾城城底ゐるとをハ城ハとハ不

中ハ也今ハ傾城城をハ城ハと云也　寛永四年

傾のそこ居りと云ハ浅ハ考ふけて引色有さる歌

まそ不動まるハまふよ切うる磐ひありて傾の

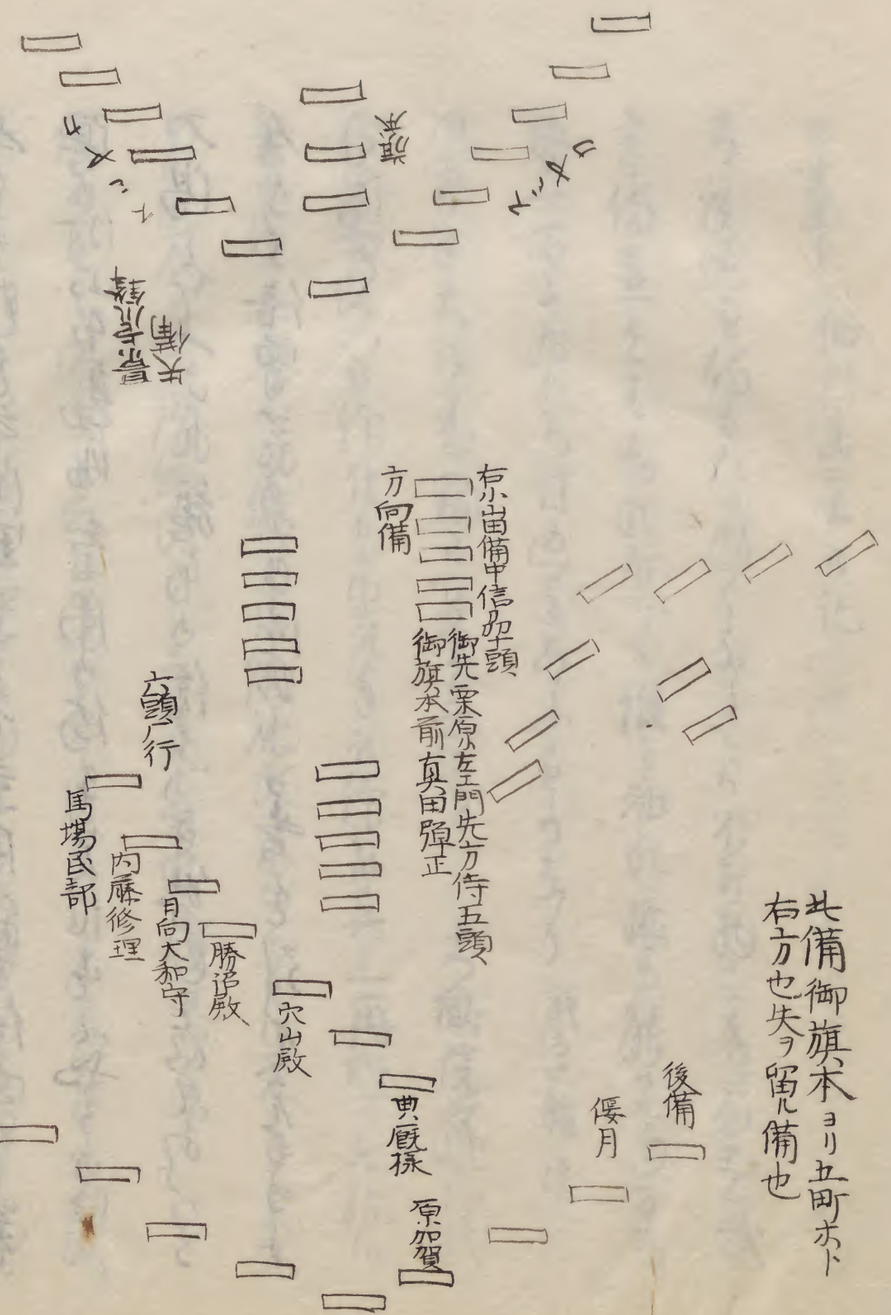
考くふむを云傾野ゐまて京席和て伝云云と第

陣の時山本勘助京席の傾をそれてそこやうの中

ハ湯といふ和舞ものの働くさ磐ひをそれてあハる

考ゐる信置第の人ハ佐ゐふ事を引て見もの

同記く



隙しら勢のとい侍の場あるて其地形かくれたる所ゟ侍之る其地形ハ山陰森林の陰所等心たとつハ形ゟ方と云とも侍ハ混雑とつかしれ打ちてもうても其地形ゟよう味方の勝ゟ困つ色ちかく勢ハ二方ゟ不侍ゟハ二ゟ三ゟなたるつきるあり多たるゟ能かるべしあるしきたるハ之時間を他つて之也つゟ一ハ勢ハ強しとあり　義弘語

内閣文庫
國書刊行會

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan